

ホトトギス

六月号

ホトトギス

昭和二十三年六月二十八日運輸省特別掛紙郵便物第五七号
明治三十一年十月十一日第三種郵便物認可(毎月一冊一日発行)
平成二十年六月一日発行(第四百一十一号第六号)



俳句随想 〔三百十二〕

汀子

俳句を募集するイベントの数が驚くほど増えた。それらの多くには賞金が付いている。中には百万円単位の賞金が付いているものもある。明治初期の宗匠たちの点取俳句の興行が横行した様相に似てきたようで心配である。明治の始めには、すっかりした宗匠が相次いで亡くなる一方、俳諧人口は急激に膨張したのである。点者達はそれを当て込んで盛んに興行を行い、それに応募する者は当て込みの俳句を投句する。このようにして俳句はどんどん墮落して行った。旧派の宗匠の中にはこの風潮を是正し、俳句を改革しようとした三森幹雄のような人も居たが、教部省によって俳句教導職に任命された彼の取った方法は芭蕉を神格化し、芭蕉の像を作って崇めることを進めるというものであった。「芭蕉に返れ」という文学運動ではなく、「芭蕉教」という一種の宗教を作ろうとしたのである。かくて旧派の俳句は更に混沌としたのである。

子規はこの状況を見て俳句を革新せねばならぬと決心したのであった。そのことをよく知る虚子は懸賞俳句には断固反対であった。年尾も私も同じである。

句日記 汀子

平成十九年六月二日 菅屋ホトギス会

外すまで気づかれずあてサングラス
青芝を刈りて外しぬ木戸の錠
音立てて象の小川も夏の川
風渡る音青芝に来て消ゆる

六月三日 関西野分会

黒南風の吹き松風となるところ
黒南風の雲に乗りたる早さかな
柿の花とは目立たずにある所在
花を待つつ柿の若木の葉の光
皆事情持ちて集ひぬ明易し

六月三日 下萌句会

紫陽花の葉に紛れたる蕾かな
藁棲みついてゐし荘のこと
草取のきりなき仕事電話鳴る
夢にまで齟齬となりけり明易し
山荘の雨の一日七変化

六月四日 ロイヤル俳壇

でむしのお酒落の縞模様
美穂女ましまさばまさばと業平忌
一八の古代紫活けられし
業平忌今の世にも無口でありたしと
かたつむりよりも無口でありたしと

六月八日 工業倶楽部

いつ出来しいつ消えしかと蟻の道
その香りどこかに咲いて柚の花
蟻の道踏みさうに來しハイヒール
六月九日 北近畿ホトギス俳句大会前日句会

句ひけり新樹の森の深ければ
山の上り新樹の雫こぼす森

六月十日 北近畿ホトギス俳句大会

露涼し目覚木よき旅よき日和
二日目は泰山木の旅くホテル
六月十一日 大阪倶楽部

雨止んで名残の雫夏木立
鈴蘭を植えて旅路をつなぎけり
ビル街といへどここにも夏木立
潮の香も加はつて来し青嵐
待つといふ心の汗をぬぐひつ
森深し音にはじまる青嵐
旅の日をつなぐ涼しき会話あり

六月十二日 綿業倶楽部

苔の花よりつながつて涼
星を見に出でて動くもの
外切りの風恋うて出る庭
又次の仕事の山を積みし汗

六月十四日 清交社

短夜や夢の思ふ覚悟のやうなまじく
梅雨入りとも思ふ覚悟のやうなまじく
蟻の道古木の根方へとつづく
夏菜莢の渋味酸っぱ味問はずとも
三四人来て夏菜莢の色を消す
山の蟻踏み越えてゆく蟻の道

六月十六日 句会と講演の会

蜻蛉生る疑念小かな水辺にも
汗行き来質疑応答はじまりぬ
青芒原には風も日も過客
質問は答へは汗の涼しさよ

六月十七日 野分会

ひつそりと花を咲かせしことも柿
南風吹き雨待つ心あるばかり
南風又待たれてすとんと着陸す
黒南風を抜けてすとんと着陸す

六月十九日 有恒倶楽部

丹波路の人すなはち栗の花
五月雨の予報外れしこと嬉し

どうしても浮巣と見えぬ距離のあり
微句ふことにも馴れて山の荘
六月十九日 無名会

オリイブの花の微塵の零れつく
單純に出水を撒きしと家居らず
計画に乘れざることも五月雨る
計画に乘れざることも五月雨る
五月雨れてをらざると告げ着席す
いつも実を期待してオリイブの花

六月二十日 夏潮句会

梅雨晴し風心地よし開け放つ
よべ咲きし月下美人と気づくまで
雨のち晴少し汚れし合歡の花
風音の中に梅雨晴あることを

六月二十一日 時雨会

夏事終へ家路に着きぬ虎が雨
月細し水鶏の声を空に抜
白買へば赤のペゴニア欲しくなる
今日夏至と思ひたるより仰ぐ空
又少し遠ざかる声水鶏鳴く

六月二十五日 春菜会

皆一つ年を重ぬし五月晴
さくら道迷ひて汗の運転
庭に出て誰が誰やら夏帽子
皆若き今日を知る仲間涼しさよ

六月二十六日 第二句会

身構へし暑さを脱いで行くロビ
いつも会ひ会って話して明易し
日の射して梅雨の旅路を輝かす

六月二十八日 きんぎょ会

山梔子の白を汚さず雨上る
ポケツトのなき立苦の旅ならず

廣太郎句帳

廣太郎

平成十九年六月二日 虚子記念文学館投句

汀子邸より記念館茂りゆく

六月二日 目黒学園句会虚子記念文学館吟行

万緑の育つ六甲よりの風
濃淡を競ひて館の緑かな
記念樹の桂緑といふ主張
鈍色も涼し高濱年尾像

木下闇あなたの赤が眩しくて
青芝に靴の戸惑ひありにけり

風止んでよりさゆらげる今年竹

六月三日 野分会吾風例会

虚子館の木々の吹き南吹く
御自慢の庭芝育てつつ南風
故郷に近付く車窓南吹く

六月四日 はせを句会

南吹くとは海風に川風に
薫風にビル突つ込んでゆきにけり

六月六日 一水会

花みかん色に愚陀仏庵暮るる
蛇舌を出す人間は顎を出す

六月七日 蕉心会

サンガラス猫は見抜いてをりにけり

ビル風を発ち南吹く川端に
入梅を拒む日のあり風のあり
この空のどこに梅雨雲をまんねん
日照雨てふ涼しき水面ありにけり
蕪像の目線に南風折れ曲る

六月八日 六甲会

黒南風を纏ひ新幹線発車
三変化四五六変化七変化
黒南風を従へ五百キロの旅
紫陽花の濡れ色といふ一変化
紫陽花の毬蹴つてゆく羽音かな
風といふ絵筆紫陽花染めてゆく
丸ビルもマルビルも黒南風に黙
七変化タイガース早よ変はらんか

六月九日 北近畿ホトトギス大会

邂逅や雷雨を抜けて来し人と
草笛の名手に晴れてゆく山雨
時鳥聞くより天守鎮もれり
風に日に人に泰山木開く

六月十一日 朝日カルチャー若草句会

光るてふ蛍の嘆きありにけり
初蛍舞ひ敦盛か維盛か
蛍の星になりたき飛翔とも
一閃の蛍闇の句読点

六月十四日 土筆会

雨といふ一ト色重ね花菖蒲
草を引く庭無き都心侘住ひ
草を引く専業主婦でありにけり
火取虫寄せて江戸より続く宿
花菖蒲羽音の紛れやすき白

六月十六日 ホトトギス社句会

シテ出づる如くとんぼう生れけり

六月十九日 草木瓜会

田を植ゑて日本の四季彩れり
田植済みたるUターンラッシュかな
農学部出し君早苗開かな

六月二十一日 登高会

明日に夏至控へホトトギス社活気
鰻やて昼ごはんもう済んだがな
夏至の午後てふ太陽の笑顔かな

六月二十四日 伝統俳句協会通常総会二次会

五月闇大輪先生阪神ファン
一本の冷酒に躍る掌
短夜の靴札君と分ち合ひ

六月二十六日 若水句会

天地創造は六月かと思ふ
砲声も富士の雪解を促せり
十号車五番D席雪解富士
六月や結婚考へてまへん
選集を選び虚子や雪解富士
青柚の香閉ぢ込めてゐる葉裏かな

六月二十七日 目黒学園句会

七変化 風紫に変はる時
ぬるぬると鰻ぎよろつと鰻の目
明易や森に命の目覚めゆく
桶の縁使ひ切つたる鰻かな
七変化一変化見逃しました
短夜や七回裏の甲子園
五月晴繋ぐ車窓は祝ぎの旅

六月三十日 田鶴四五〇号記念祝賀会

五月晴繋ぐ車窓は祝ぎの旅

雑詠

廣太郎 選

ハローてふ起床案内の初電話 神戸 千原叡子
 旅なれや南仏の地図読初に 同
 時差惚けを隠れ蓑とし寝正月 同
 御慶ごと運ばれてゐる昇降機 同 山田弘子
 企画会議編集集会議松の内 同
 プロヴァンスよりの旅土産春隣 同 浅井青陽子
 軒々に素麺すだれ干しの峽 たつの
 やぶつばき一輪活けし応接間 同
 大とんど昨日に濟みし池の端 同
 束の間の薄日も覗く雪しまき 長岡 安原 葉
 雪しまく駅に見通したたぬ旅 同
 雪国を出でて一夜の避寒宿 同
 夜明け待ち兼ねて海苔舟出してをり 福岡 松尾緑富
 漸くに海苔採適ふ磯日和 同
 海苔採のおくれおくれの海明けて 同
 お降と云うてはをれぬ降り様に 榎原 稲岡 長
 青垣の高さ失ひ奈良は雪 同
 いささかの雪解濁りに飛鳥川 同

竹馬や空の青さを連れてをり 大阪 佐土井智津子
 竹馬の影が上手に乗つてをり 同
 竹馬や肩の高さに富士の山 同
 凍蝶の動かぬことに人はイチ 熱海 嶋田一步
 凍蝶の触れてくづるかとも見え 同
 凍蝶と思ふが飛べよとも思ふ 同
 早梅や出て見てほしく夫へ声 同 嶋田摩耶子
 節分はあと幾日や爪を切る 同
 内温泉のありて健康寒に入る 同
 蘭玉の揺れ止みて又独りの間 香川 湯川 雅
 水際で止つてをりぬ落椿 同
 待春の歩が大地より受くるもの 同
 凧に縮こまりたる富士のあり 相模原 木村享史
 木の葉雨降る音谷へ沈みゆく 同
 懐手解いて論敵との握手 同
 除夜の闇日本海の怒濤より 福山 竹下陶子
 受け継ぎし父の一刀家の春 同
 向日葵の百万本の大合唱 同
 あけぼのやほのと影もつ嫁が君 神戸 長山あや
 霜柱踏めば大地に木霊湧く 同
 一献のごと水仙の香を賜ふ 同
 縄張の闇に目を置く恋の猫 東京 橋本くに彦
 恋猫の思ひの丈のジャンプかな 同
 菰外に日ざし余して冬牡丹 同

雑詠句評（五月号より）

中正・静龍・保佳

千鶴子・葉　　・とほ歩

美　奇・むつみ・眞理子

憲　明・芳　子・廣太郎

大綿の飛ぶ三次元生れけり 徳島 上崎暮潮

大胆な着想と表現で、やはり理系の作者ならではの句である。この句の若々しさには感心させられる。

普通なら、大綿の飛ぶ「空間」と詠むところを、作者は「三次元生れけり」と、斬新な見方で、しかもダイナミックに詠んだ。これで、静止していた綿虫が躍動する姿が見えるようになった。

ポイントは、この綿虫は今、一次元でも二次元でもない三次元を飛んでいるのだと、あらためて発見した作者の生き生きとした好奇心と感動である。もつといえ、これが作者の個性であり、科学者の眼である。

さらに、この「三次元生れけり」は、大綿の飛ぶさまの凝視の上での発見、つまりしつかりした写生に基づいているので、新奇な言葉に頼っているという違和感がないことも、付言しておきたい。

（中正）

昔あるコミックで、漫画で一次元から四次元までの、その違いを解説しているのを読んだ記憶があるが、我々の生きている世界は勿論三次元、つまり縦、横、高さという三つの空間である。この「大綿」も同じ世界にいるわけだが、敢えてこの空間を詠み、立体感が生れた。（廣太郎）

初旅を終へ日常に着陸す 龍ヶ崎 今橋眞理子

新年になって初めての旅行は心の浮き立つものがある。その心浮き立つ旅を終えて今戻って来て飛行機が着陸した瞬間、現実の日常生活が待っていることを自覚している作者。

海外旅行をした時など飛行機が着陸態勢に入ったアナウンスが始まると、もう一度このまま今来た旅行コースを巡りたいと思う気持が湧いてくる。そのような思いに関係なく飛行機は着陸し停止する。そうすると今度は一気に現実に戻り元の生活の延長へと思いが走る。そのような心の状態を「日常に着陸す」と言って具体性があり省略の効いた言葉で心の動きを表現している。

（静龍）

その年初めてする旅は、やはり新年に近い事もあって、普段の旅よりも心がうきうきするのではないだろうか。作者もそんな心持ちで楽しく旅をして、そして飛行機が帰路の空港に着いた。それだけ「初旅」を楽しんだだけ日常とのギャップも激しいのかも知れない。省略が効いている。（廣太郎）

（以下略）

天地有情

江子選

黄泉路行く夢覚め生きて居る寒さ
 賀状受く世に忘れず生きる幸
 昨夜の星霜となりゆく仔細かな
 吉備時雨とはた嫺やかに穏やかに
 快晴の旅路雪国脱け出して
 風もなく穏やかな日や野水仙
 もの思ふとき傾いてゐる冬木
 種を採るこの世に仮の宿りして
 四温とは天の励まし癒えたまへ
 俄なる四温に心許さざる
 初春の切口しかと飾炭
 浮世絵のトランプ何を占ふや
 舟形の帆の火の虧けて蓮華なす
 大文字の五山をつつむ星座かな
 飛鳥野の起伏知らしめ残る雪
 やはらかに澄める空気や梅ふぶむ
 杖音もまたよからずや落葉踏む
 歩かねば足は弱るぞ石路の花

京都 神前あや子
 同
 東京 稲畑廣太郎
 同
 長岡 安原 葉
 同
 熊本 岩岡中正
 同
 神戸 山田弘子
 同
 同 後藤比奈夫
 同
 福山 竹下陶子
 同
 榎原 稲岡 長
 同
 徳島 上崎 暮潮
 同

初春や千の風こそ吾が讃歌
 若者は逝きて帰らず明の春
 八手咲く小城下の路地辿り来し
 万葉の島を望める梅の丘
 先づ風に五月の力漲れる
 一群の踊子草もまた吉野
 失ひしものをそれとし寒明くる
 星生れ星消え春の立ちにけり
 淋しさと寒さの分ち難くをり
 風よりも淋しき声に鴨啼けり
 寝たきりの母の差配の小豆粥
 水仙の荒磯の音に身を寄する
 雲の中雪しまきぬる富士ならむ
 雪しまきぬしてふ朝の丸の内
 雪吊の疎にして空の美しき
 一即多多即一と雪吊よ
 二十日月残る岳麓霜を踏む
 風一つなきあかときの霜に付つ

豊中 瀧 青佳
 同
 たつの 浅井青陽子
 同
 金沢 藤浦昭代
 同
 八尾 岩垣子鹿
 同
 神戸 長山あや
 同
 東京 内藤呈念
 同
 同 今井千鶴子
 同
 東村山 村松紅花
 同
 吹田 宮崎 正
 同

天地有情句評 汀子

黄泉路行く夢覚め生きて居る寒さ 京都 神前あや子

ふつと黄泉路の夢から覚めて現実の寒さであった心情。

昨夜の星霜となりゆく仔細かな 東京 稲畑廣太郎

凍てた夜空は空気が澄んで見事な星空であった。やがて霜が降

りて行く。

快晴の旅路雪国脱け出して 長岡 安原 葉

雪晴の朝となった。雪国を抜け出すような旅路とは妙。

もの思ふとき傾いてゐる冬木 熊本 岩岡中正

ふと気がついた冬木の存在。

四温とは天の励まし癒えたまへ 神戸 山田弘子

四温が病に良かれと願う祈り。

初春の切口しかと飾炭 神戸 後藤比奈夫

料亭の新年の飾炭の切口に祝意を見た作者の感性。

大文字の五山をつつむ星座かな 福山 竹下陶子

京都の夜空を焦がす大文字の送り火を包むような星座の輝き。

飛鳥野の起伏知らしめ残る雪 樺原 稲岡 長

飛鳥の野の起伏を彩る残雪。

歩かねば足は弱るぞ石路の花 徳島 上崎暮潮

自らへ言い聞かせることで元気が湧いてくる作者。

初春や千の風こそ吾が讃歌 豊中 瀧 青佳

亡くなった人を悼む歌を讃歌と言いたい作者の新年の心情。